

Q1 祇園橋はどこにあるの

祇園橋は、熊本県天草市の中心本渡の船之尾町と中央新町との間にあります。架橋当時は町山口村という地名でした。

祇園橋は、旧町山口村の町山口川の下流に、下島の南北を結ぶ往還橋として架けられました。石橋としては最初の架橋です。往還道は、下の地図のように、現在の本渡橋と諏訪橋の間にあったようです。この往還道からやや外れた位置に架けられたのは、この地点の川幅が広いことや頑丈な岩盤が無かったためかと思われます。

この辺りは、江戸時代の天草の首都が富岡町（現苓北町富岡）から、維新後、本渡に移されたことから、天草の中心として、町役場等が置かれ、また商店が立ち並び、賑わっていました。筆者の手元に、大正六年発行の『本渡案内』という地図がありますが、これを見ますと、郡役所、警察署、本渡町役場、税務署などの官公署（所）がこの地に集中しています。また、学校や商店、旅館などが所狭しと建っています。

大正六年ですから、架橋からずいぶん後（84年後）になり、当時とは比較にならない発展を遂げています。祇園橋からは、横道に逸れますが、ついでにこの地図に書かれている興味深いものについて、記して見ましょう。

船着場は諏訪橋で、ここから三角行、茂木（長崎県）行、

祇園橋・千人塚発掘の地 位置図



牛深行それぞれ一便出ています。魚市場が現在の銀天街にあることから、大正時代でも、現在の五間道路付近は海でした。また、発電所も諏訪橋のすぐ近くに建てられています。

また、当時の本渡町の現況も載っています。それによると、戸数一千戸、人口四、九五九人とあります。ちなみに天草郡全体では、二十一万六千五百四十八人とあります。現在は天草島全体で、十二万人余ですから、ずいぶん多かったのですね。

でも、戦後、官公庁の移転や郊外の大規模商店の登場で、かつての中心街は近年さびれつつあります。

また、寛永十四（1637）年の天草島原の乱では、この祇園橋付近一帯で、唐津軍と一揆軍とが衝突・激戦が繰り広げられ、川の水は戦死者の血で真っ赤に染まったと言われています。前ページの地図を見てもらうと、千人塚発掘の地がみられます。（天草の乱については後述）

さらに、昭和三十九（1964）年には、中央商店街で全半焼百三戸という本渡大火災が発生しています。

ちなみに、町山口川には、石橋としては、祇園橋の約2.2 Km 上流に、施無畏橋という眼鏡橋が架けられています。この橋も、立派な石橋です。

（p41天草の石橋めぐり参照）

Q2 なぜ祇園橋と名前が付いたの

祇園橋架橋当時は、名前はなかったのですが、この橋の左岸に祇園神社があることから、何時の頃からか祇園橋と呼ばれるようになったようです。祇園橋の際に、架橋記念碑が建てられています。ただ石橋と記銘されています。

昔は橋の数も少なく、特に橋に名前を付ける必要がなかったのかもしれませんが。祇園橋と呼ばれるようになったのは、いつからか定かではありません。ただ祇園橋という名はいい響きを持っています。たまたま祇園社があったから付いた名ではありますが、もし他のダサイ名前だったらこれほど有名にはなっていないかもしれません。もし前に、祇園神社がなかったら、なんと呼ばれていたでしょうか。あなたなら、なんと名前を付けますか。親は生れた子に、苦心惨憺して名前を付けるのが普通ですが、名前はやはり重要です。

〈菫蓍〉ウイキペディアより

祇園神社は正式には八坂神社。神仏分離以前は、現在主祭神とされているスサノオが、祇園精舎の守護神である牛頭天王と同一視され祀られていた。明治以後は、仏教の神である牛頭天王は祭神から外され、スサノオだけが祀られている。総本社は京都の八坂神社。したがって祇園は愛称。しかし、祇園祭など、祇園という名は各地の地で親しまれている。

Q3 祇園橋はいつ架けられたの

祇園橋の竣工はいつなのか。二つの説があります。というのは、橋の袂に建っている架橋記念碑の竣工年が、三年とも五年とも読み取れるからです。

そこで五年説についてみると。

記念碑には「天保五（三）年壬辰十一月吉日」と記されています。つまり干支は壬辰となっています。天保五年は壬辰ではなく、甲午ですから、年号と干支が相違しています。当時は文書や鳥居、墓などの建築物には必ず、年号と干支が書かれています。つまり、当時の人は、干支と年号を間違うはずはありません。この相違について、地域研究史家の鶴田文史氏は、次のように分析しています。

元々三年に竣工するはずだったため、記念碑には、天保三年壬辰と刻字していたが、何らかの都合で竣工が五年になった。この都合とは、天草で、天保三年に大一揆が発生している。このことが架橋完成を遅らせたことに関係しているのではないか。この時記念碑は既にできあがっていたため、三に線を入れて五にしたが、壬辰を甲午には修正できないので、そのままにしておいた、と。（『国重文 祇園橋』参照）

修正がなかったとして干支を重視すると、天保三年になるので、祇園橋の竣工は、三年説もあります。年数字をよく見ると、三を五にしたような、あるいは傷のような、微妙なところだ。さてどちらが正しいのでしょうか。



祇園（八坂）神社と神社から見た祇園橋

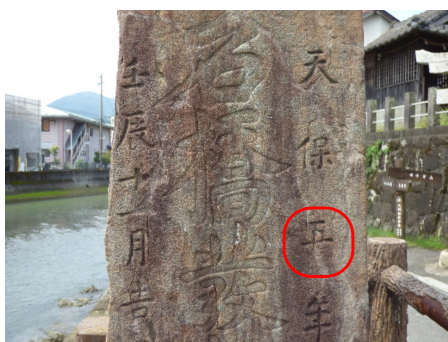
文化庁登録には、三年説が取り入れられています。

竣工年がはっきりしないのは、この祇園橋架橋についての文書がないためもあります。もし、文書が見つければ、竣工年だけでなく、様々な疑問点がはっきり分かるのですが。

架橋竣工は三年か五年ですが、それでは架橋に取り掛かったのは、いつでしょうか。確かな史料は存在していないので分かりませんが、地域史研究家の鶴田文史氏は、戯曲「天草の大石橋・架橋物語」で、取り掛り（発起）を文政十二（1829）年としています。そして、石切りが始まったのが、天保元年、架橋工事開始は、天保三年、そして完成が天保五年として、推定されています。現在でもこれだけの工事は、ずいぶんかかると思うので、実際はまだ長い年月を要したと思いますが、どうでしょうか。

架橋竣工は、いずれにしても、明治維新が1868年です。すから、維新の約30年前という事になります。天保といえば、水野忠邦の天保の改革（天保十二〜十四年）が行われていますが、改革が行われたという事は、つまり世の中が正常でなかったという事です。

大塩平八郎の乱（天保八年）や、各地で大規模な百姓一揆が起きたりと混沌とした世の中でした。またモリソン号事件（天保八年）や、清国ではアヘン戦争（天保十一〜十四年）が起きるなど、外国からの脅威も高まっていました。



架橋記念碑

左上写真、石橋としか記銘されていない。

左上写真・天保五年 壬辰と記銘してある

左下写真は、年数字を拡大したもの

三を五に修正したのか、それとも疵なのか



また、幕府だけでなく諸藩でも財政危機が高まった時期でもありました。

では、天草ではどうだったかというと、総人口が十四万人を超え、超過密の上、異常気象により、農産物は不出来で、庶民は困苦にあえいでいました。

また、流通経済が盛んになってきたため、金を持たない農民は、銀主への借金をし、その返済ができず、田畑を取られるなど、貧富の差が大きくなってきました。

当時は年間一人一石の米が必要と言われていました。また生産性も低く、一反で生産できる米は一石だったそうです(但し上田)。天草は、土地が痩せていたり、水の便が悪かったり、棚田であったりと、一反で採れる米は、ずいぶん少なかったようです。

この米を全島民で消費するとして単純計算すると、天草は二万四千石程度だったので、せいぜい二万余人が妥当な人口と言えましょう。

しかし、百姓が生産した米は、年貢として取られ、手元に残る米はわずか。では生産者たる百姓が食べれるかというと、そうではありません。金に換えたり、借金の返済にあてたり、米は、正月と盆に食べられるといい方でした。そのうえ、異常気象による災害が起き、生産性はますます低く、かといって、年貢は納めねばならず。

このように、困苦に喘ぐ天草では、騒ぎ百姓騒動(一揆)が頻発するなど、世情は混沌としていました。



かつて祇園橋袂の神社境内に、南蛮えのきの巨木があったという案内板

天保三年からは少し後（15年後）になりますが、弘化四（1847）年には、第二の天草の乱とも称される、弘化の
大一揆が起きています。

よくこんな時代に、大事業ともいえる、祇園橋が作られた
ものです。

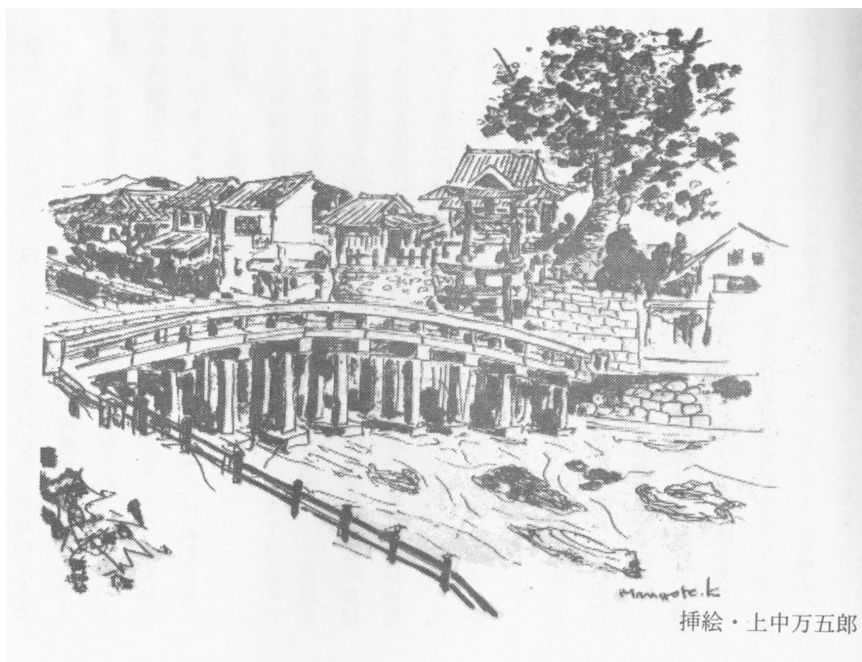
天草は、一般的に天領（幕府領）と言われていますが、
私領時代あり、また、同じ天領でも、専任代官がいた時代、
長崎代官や日田郡代の兼任時代、島原藩主兼帯時代など、
目まぐるしく支配者が替わっています。さらに支配者は三
十三名もの人が替わっています。これもまた、天草の不幸
と言ってもいいかもしれません。

この橋の架橋当時は、長崎代官高木忠任兼任で、天保三
年三月に、日田郡代塩ノ谷正義兼任となっています。さら
に、そのわずか四ヶ月後には、長崎代官高木忠篤兼任に替
わるという慌ただしさです。

ある意味、幕府にとって天草は、厄介者だったと僻^{ひが}みた
くもなります。

「参考①」天保二年 この歳、郡中総石高二万四千六百七
十七石二斗三升二合一勺、総人数十四万五千五百
八十八人なり（『天草近代年譜』松田唯雄著）

「参考②」天草支配者の移り変わりについては、HP「天草
探見」（管理人・拙著者）を参照ください。



南蛮えのきありし頃の祇園橋

絵 上中万五郎 『国重文の祇園橋』より

Q 4 祇園橋は誰が架けたの

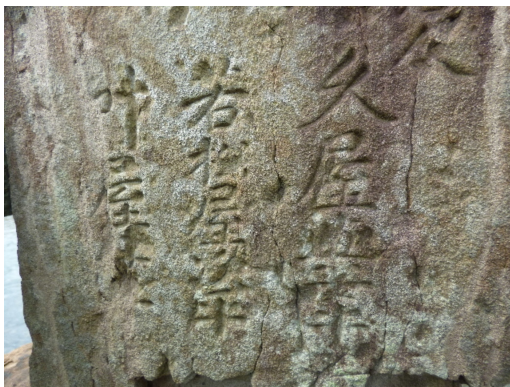
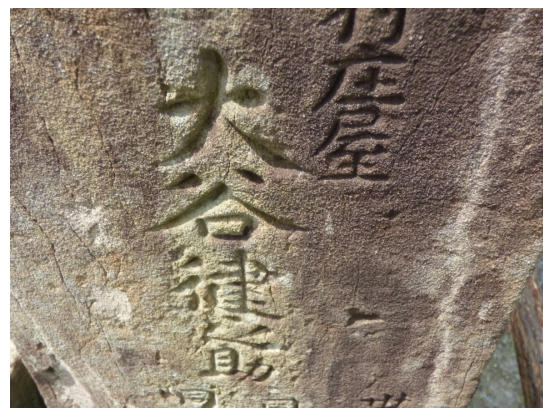
橋は公共物ですから、現在では造るのは国や県、市町村、あるいは法人などの公共事業として行われるのが一般的です。

その図式でいうと、天草は天領だったため、幕府が行うべきですが、幕府には庶民のために橋を架けるという発想自体なかったようですし、その意思もなかったようです。

それでも、どうしても公共事業として行わねばならない工事は、諸藩にやらせたのですから、横暴もここに極まりたりというところでしょうか。ただ、これには、諸藩の経済力を弱めるという意味合いもあり、幕府にとつては、自らは金を出すこともなく、一石二鳥といった具合でした。

当時天草の政治の中心は、富岡町であったので、本渡などは、幕府の眼中になかったのかもしれませんが、そのため、祇園橋架橋は、幕府にとつては、必要な工事ではなかったため、正にノータッチでした。しかし、そこに住む住民にとつては、必要な橋であり、どうしても架けざるを得なかったものと思います。そのため、仕方なく、民間の手によって架橋されました。

といっても、そこに橋がなかったのではなく、木造の橋はあったものと思われます。（木造の橋の上に土を乗せていたため、土橋とも言われていた）ただ、木造の橋は耐久性もなく、洪水のたびに流されることも多く、そのたびに、



架橋記念碑には

発起人・当村庄屋 大谷健之助

世話人 久屋與一平 若松屋次平 叶屋伊平 の名が刻まれている

架け替えていたものと思われます。そこで、大谷庄屋を始め、村役は、強い橋作りに一大決心をしたものと思われます。

そして、その強力な味方が、下浦石工の存在でした。

石で橋を作ったら、ずいぶん長く持つのではないだろうか。

という事で、下浦石工に頼み込んだのです。

しかし、事はすんなり運びません。いくら石工といっても、川に橋を架けるというのは、天草では初めてのことでもあり、技術的にとても大変なことで、村と石工との間に時間をかけた交渉が行われたことは、容易に想像ができません。

大谷健之助町山口村庄屋から、何度も何度も、粘り強く、建設の要請を受けた下浦石工。でも、数多い石工の中でもワシがやります、と手を上げる人はいません。

でも、これだけ懇意に頼まれて、断わったのでは下浦石工の名折れです。

そこで白羽の矢が当たったのが、辰右衛門でした。

或いは、辰右衛門が名乗りを上げたのかもしれませんが。

とにかく、下浦石工の名に懸けて、立派な石橋を作ろうという事になったわけです。（お断り・これは筆者の想像です）

架橋記念碑には。

石橋発起主 当村庄屋 大谷健之助

世話人 久屋與一平

解説 《^{ぎんし}銀主の出現》

天草が戸田領になって寛文五年（1665）郡中酒屋改めを行い、酒屋株62件が決められた。

この頃になると流通経済が盛んになり百姓も自給自足の生活はむつかしくなった。必要な物資を買う必要が生まれ商業を営む者も現れた。ぎりぎりの労働を強いられている百姓の中には酒に溺れる者を出るようになる。酒の需要は高まるばかりであった。

このような商業者、ことに酒屋を営む者たちから銀主、または徳者と呼ばれる金持ち階級が生まれた。彼らは代金を払えないものから田畑を質に取り金を貸した。やがてその質草は流れて貸手の所有となり、大地主に成長した。（中略）

このような銀主が大小280ほど生まれ、その所有する田畑の総面積が全郡の3分の2に達した。勢い貧富の格差が拡大して社会問題に発展する。後に述べる百姓一揆の引き金になった。（『天草の歴史』天草市教育委員会刊）

〈『改訂版 天草の歴史』天草市教育委員会刊 より〉

同 若松屋次平
同 叶屋 伊平

の四名と資金を提供した人の名が一七八名刻まれています。
また、「惣村中軒別二百文加勢」とも記されています。

当村とは、町山口村のことですが、近在の村の人も資金を提供しています。

つまり、町山口だけでなく、近在村にとつても、この橋が必要な橋だったことが分かります。

世話人の人は、当時町山口村の有力銀主だと言われています。

Q5 建設者はどんなひと？

架橋記念碑に、下浦村石屋辰右衛門と記銘されていることから、棟梁の名前が分かります。

下浦村とは、現在の天草市下浦町です。

この下浦村に、松室五郎左衛門という人が、宝暦年間に肥前の国から渡ってきました。彼は、白石藩の武士でしたが、訳あって浪人となり、下浦村に住みついたといわれています。彼は下浦村に建造物に優れた石があることを発見し、石工となり、多くの弟子に石工の技術を伝えたそうです。

でも武士がいくら器用でも、下浦に来てから石工になるというのも、いささかおかしい気がします。もともと石工の技術を持っていたとしか考えられません。

しかし、五郎左衛門が元祖となり、下浦に石工の技術を広め、代々その技術が伝えられ、下浦は石工の里として栄え、天草のみならず島原・長崎方面まで、下浦石工の名を高めました。

現在天草にある鳥居などには、多く下浦石工の名が刻まれています。

祇園橋架橋の棟梁、石屋辰右衛門については、よく分かっていますでしたが、近くの住む郷土史家の近藤鉄男さんの調査研究によって、次のような点が明らかになりました。

① 辰右衛門の家系が判明

辰右衛門の末裔が、松岡さんといって、石場地区に住んでおられ、その家に辰右衛門の位牌が残されていました。位牌には「静譽龍秀信士・辰右衛門・天保四年己六月二日」と書かれています。また、辰右衛門の奥さんの戒名も並べて書いてあります。これは、円性寺の過去帳や松岡家の墓碑（法名塔）に刻まれているものと一致しました。

② 辰右衛門の二代後から苗字を名乗る

辰右衛門は、祇園橋の架橋記念碑に「下浦村 石屋 辰右衛門」と刻まれているように、苗字を有していなかったが、二代目から松岡姓を名乗っています。

③ 辰右衛門の墓も存在していた



松室五郎左衛門の墓 左は古墓？ 下浦町石場区 共同墓地

天草市指定文化財

下浦石工元祖

松室五郎左衛門の墓

指定年月日

昭和五九年一月九日

管理者

石場区

五郎左衛門は、元肥前国白石の藩士でわけあって浪人し、宝暦十年（一七六〇）頃天草に来て、当地に移り住み石工となった。その後島民に石工技術を教授石工業の発展に寄与し天明三年（一七八三）に没した。近くの山中には明治一八年（一八八五）花岡大明神が祭られ毎年祭礼も行われている。

天草市教育委員会

〈松室五郎左衛門の墓案内板より〉

辰右衛門の墓は、天草石工元祖の松室五郎左衛門の墓がある石場共同墓地の一角にある。その墓は、普通の石塔と違って、人形墓です。高さは60cmの坐像石仏で、蓮の花を左手で肩にかざしています。

かつて辰右衛門の石仏の下に仏石や台石が重なっていたようですが、松岡さんが、納骨堂を建てた際、掘り返した穴に埋め込んでしまったそうです。仏石には、辰右衛門の戒名が刻まれていたそうです。松岡さんは、辰右衛門が祇園橋を作った棟梁であることを薄々知ってはいたが、偉い人とは知らなかったようです。残念なことです。先年訪れた時は、人形墓は古いものでしたが、現在は造り変えられて、新しくなっています。

また、辰右衛門の生年や享年は判明していません。

④ 妻について

辰右衛門の妻は、「冬覚妙仙信女」との戒名で、残念ながら俗名は書かれていません。亡くなったのは、天保十三年十二月二十六日です。

⑤ 五郎左衛門と辰右衛門の没年に五十年の開き

五郎左衛門が亡くなったのは、天明三(1783)年。辰右衛門は天保四(1833)年に亡くなっています。つまり兩人の没年には50年の開きがあります。二人の享年は分かっていますが、辰右衛門が五郎左衛門の直弟子である可能性はありませんが、二代目又は三代目の弟子である



写真右 祇園橋架橋記念碑に刻まれている、「下浦村 石屋辰右衛門」の文字。やや摩耗している。

写真中 石場地区共同墓地にある辰右衛門の墓。(新しく造り変えられている)

写真左 松岡家の墓の法名塔に書かれている、辰右衛門と妻の法名。

ことは間違いないでしょう。

祇園橋竣工が、天保三年ならば、完成を見届けて、また五年ならば、完成を見届けないままこの世を去ったことになりそうです。

辰右衛門が、これほどの名工ならば、他にも後世に名を残すような仕事をしていると思いますが、他には残っていないようです。

以上『潮騒』天草文化協会 平成10年発行の「下浦石工、辰右衛門の墓見つかる・へ参考」本渡祇園橋建造主の苗字は後に「松岡」― 近藤鉄男著 を参考にさせていただきます。

なお、この建設の様子を歴史戯曲として、地域史研究者の鶴田文史氏が「祇園橋架橋物語」を書かれています。

(収録『西海の心 天草歴史文芸作品集』 鶴田文史著 西海文化史研究所)

(同『国重要文化財指定記念誌 国重文の祇園橋』本渡祇園橋と町山口川の環境を守る会)

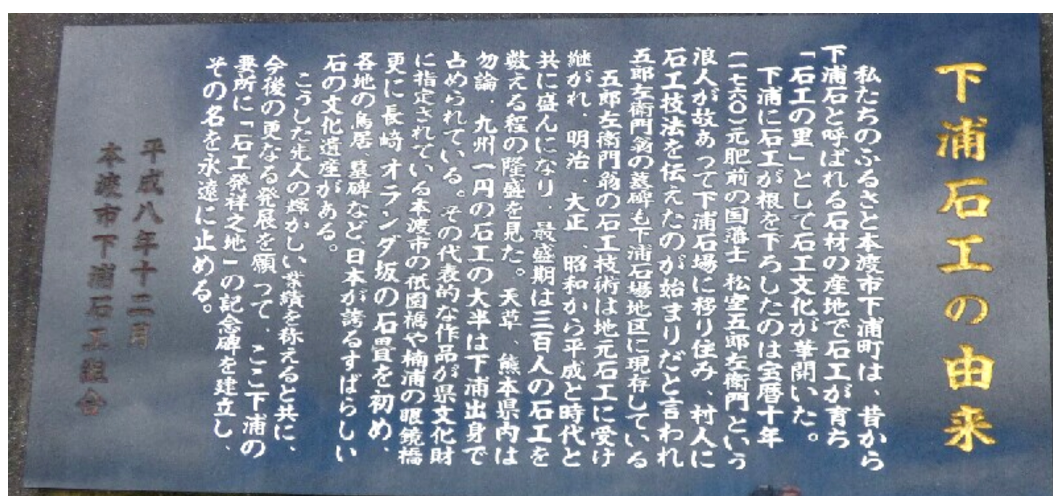


花岡大明神

明治十八年酉中春初日設立

この碑は、五郎左衛門没100年後に、地元石場の人たちが、遺徳を讃え、石工業の安全を祈願して建てました。

※近藤氏の石工の歴史と文化・潮騒H9 には、「明治十八年酉中春初日造建之」と記してあるが、初ではなく初とされる。初はまつりの意



下浦町にある石工の「下浦石工発祥の地」碑と碑文

Q 6 橋の形式は何と言うの

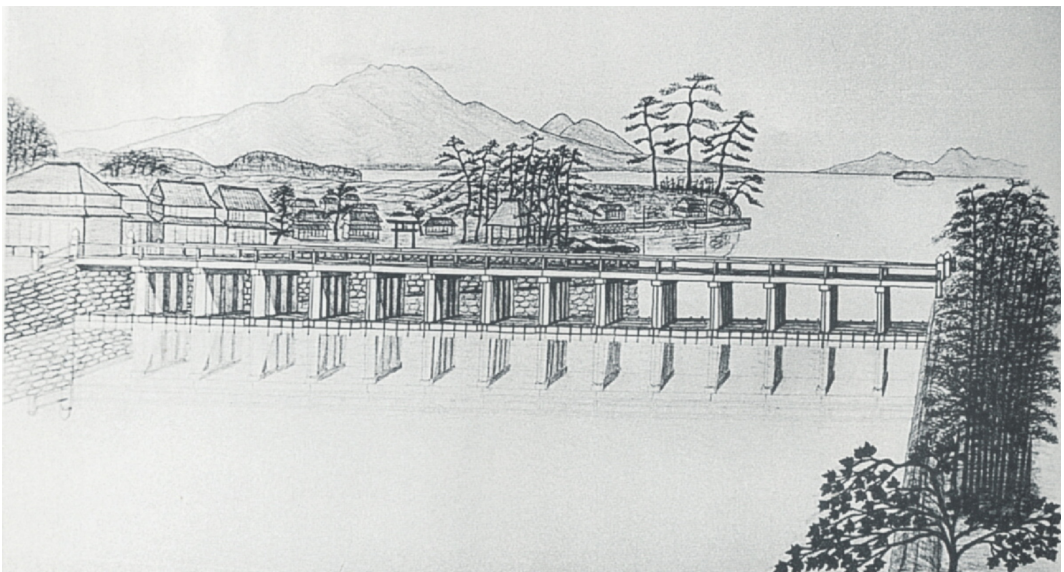
祇園橋は、難しく言うと「こうりょうえんこがた桁梁円弧型多脚柱付大石橋」というそうです。

つまり、桁梁式で円弧型をしており、桁梁を多くの柱で支えている石橋ということになります。桁梁・・・は難しいので、多脚型アーチ式石橋とも呼ばれています。

この形式の橋は世界的にも全国的にも珍しいもので、その数が少ない橋型である故に価値が高いともいえます。鶴田文史氏の他国現地調査によると、西洋には無く、東洋（中国・韓国・ヴェトナム等）には多数あるということです。祇園橋はこの形式の橋としては日本一長い橋です。中国の橋と比べると、小型ですが、優美さでは勝っています。韓国ソウルには同型の橋がありますが、円弧型では、祇園橋が勝っています。したがって、祇園橋は、世界一と言っても過言ではないと、鶴田氏は言います。

天草には、この祇園橋より長い、同一形式の橋がありました。亀場町の亀川に架けられていた「明亀橋」です。長さは41mもあつたそうです。ただし架橋年は祇園橋よりずっと後で、明治19年のことです。そして、昭和11年に解体されたそうです。

何で解体されたのでしょうか。壊れたのでしょうか。また、写真も残っていないようで残念です。



まぼろしの明亀橋 鶴田文史 画
「国重文の祇園橋」より

Q7 構造をもっと詳しく知りたい

祇園橋の石材は、下浦（下浦村）で産出する砂岩、いわゆる下浦石を使用しています。

固い岩盤の上に、一列5本の柱を建て、その上に梁を乗せ、その梁の上に桁を乗せる、つまり桁梁式です。

柱の数は、一列5本、9列ありますから、計45本の柱が使われています。

桁梁式と言うと、難しいですが、木造家屋の作りと同じ形式というのと分かり易いと思います。

したがって、梁石は9本、桁石は1列10本の10列、なんと100本も使われています。眼鏡橋は一個一個の石が比較的小さいですが、桁梁橋の石は大きいので、運搬や組み立てが大変だったと思います。

そして、橋の上部には欄干が取り付けられています。

桁とか、梁とかは建築専門用語なので難しいですが、現地を訪れることができる人は、ただ眺めるのではなく、構造的にも見て貰えたらと思います。



河床が浅いことが、橋右下の人物からも良く分かる。

Q8 なぜ眼鏡橋でないの

眼鏡橋は、柱がいらないので、洪水などには強いのですが、そのためには、川岸が高いことが必要条件です。

また、川岸が頑丈な岩盤でなければなりません。

祇園橋の付近は高さが足らないので、眼鏡橋は架けられません。しかし、幸いなことに、河底が頑丈な岩盤で出来ているので、柱がしっかりと建てられます。そのため、多脚式の石橋が架けられたのです。

ただ、当時はまだ眼鏡橋は、最新技術で、天草までその技術が普及していなかったのかもしれませんが。

ちなみに、天草にある眼鏡橋の架橋年月を見てみると、施無畏橋（町山口川）が明治四年と最も古いので、当時としては、眼鏡橋の技術は天草にはなかったものと思われる。

ちなみに、熊本の各眼鏡石橋を見てみると、天保年間はその走りのようで、当時としては最新技術だったことが分かります。

調べてみると、熊本で最初に架けられた眼鏡橋は、安永三（1774）年です。（山口祐造著『石橋は生きている』より）

祇園橋より六十年も前に架けられています。ずいぶん前ですが、当時は、現在と比べ情報伝達が遅くかつこれらは企業秘密、つまり門外不出であった可能性が高く、天草までその技術が伝わったのは、もっと遅かったと思われる。事実、天草に架けられている眼鏡橋は、ほとんど明治期

のものです。

また、熊本で最初に架けられた多脚橋は、人吉の橋で、明和三（1766）年だそうです。（鶴田文史氏調査メモより・人吉では知る人ぞ知っていたが、公にはなっていないかった）

ここでの眼鏡橋は、アーチが一つしかないのが普通です。したがって、眼鏡橋でなく単眼鏡橋が正解ではないかという疑問が浮かびます。先にあげた山口祐造氏は、一つのアーチでも眼鏡橋、あるいは太鼓橋と呼ばれていると言っています。また、長崎、佐賀方面では眼鏡橋と書くが、熊本では目鏡橋が多い。鹿児島では太鼓橋という呼称を使っている。（秋目鏡橋物語）

石工といえ、天草下浦石工以上に有名なものが、八代の種山石工です。種山石工というと、岩永三五郎や橋本勘五郎の名が良く知られています。その種山石工が造った橋で、有名なものが、通潤橋や霊台橋ですが、霊台橋は1847年、通潤橋は1854年ですから、祇園橋とは十年以上の開きがあるわけで、まだ天草には眼鏡橋建造の技術がなかったかともいえます。

でも、それらの最新技術をもってしてもなし得ない、堅固な祇園橋の建造は、下浦石工の技術が如何に高かったこととの証明でもあります。

そういう意味でも、祇園橋の持つ歴史的価値は、すごいものがあるといえましょう。



諸元

川幅は、27m。

橋の長さ28.6m。

橋横幅約3.3m。

円弧型の一番高いところと低いところは、約1m。

桁石の天上石、約30センチ角、約2.8m。

天上石（桁石）、10本×10連=100本。

梁石（桁の支石）、3.5mのが9本。

柱と柱の間隔、約2.5m。

脚石、約30cm角の柱が一行に5本、9列、45本。

長さは1.5mから2.7m

Q9 多脚式は柱が多いので、 洪水に弱いと思うのですが

確かに、脚が多いと、水圧をもろに受けます。しかし、祇園橋は、百八十年もの間壊れることなく現存しています。この間何度も、洪水に見舞われたことなのでしょう。さらに、水だけでなく上流から流れて来るがれきが柱に



引っかかり、水をせき止めることにより、水圧がさらに増します。

こんな困難（水難）に遭いながらも、耐えてきたのには、何か秘密がありそうです。考えられるのは。

① アーチ形になっている事。

このアーチの部分が空間であるため、水圧をクリ

脚の向きや角度に注目。

右写真・柱の角部を上流（右側）に対して向けてあり、水圧を軽減するようにしてある。

左写真・下流側（左側）の柱は垂直でなく、やや斜めになっており、つかい棒の役目を持たせてある。

アする。

② 河底が固い岩盤である事。

③ 橋脚の上流側の柱は、角が上流を向いている事。

そのため、水切をして水圧をもろに受けないようになっている。

④ 橋脚の下流側の柱は、水平でなく、やや斜めになっている。つっかい棒のような役目を果たしている事。

等々が考えられますが、やはり①が決定的条件でしょう。

つまり、匠の技が随所にちりばめられているという事です。

祇園橋は、見れば見るほど美しい橋です。合理性を追求すれば、美しいと言われますが、正にその典型といえるのではないのでしょうか。勿論橋の設計者・建築者は、形のいい、美しい橋を作ろうと思って作ったわけではないでしょうが、洪水対策としてアーチ型にしたのが、結果的に優美性を併せ持ったことになったようです。

Q 10 地震に対しては強いのか

洪水と共に心配なのが、地震です。

幸いにして、架橋以来、大きな地震は発生していません。でも、震度5強程度の地震に対しては、どうでしょうか。地震対策としては、専門家の方で調査されているとは思

いますが、ちよつと不安ですね。地震対策として、耐震補強が一般的に行われますが、祇園橋の場合は、大きく現状を壊すので、文化財としてはそれできないと思います。

南海トラフ地震など巨大地震が必ず起こると言われています。天草は震源から遠いといっても、安心はできません。強固な岩盤が、橋をしっかり支えてくれることを祈るばかりです。

また、地震等に伴い発生する津波も怖いですね。

天草には、寛政四（1792）年、いわゆる「島原大変・肥後迷惑」という、雲仙眉山崩壊による、大津波が押し寄せてきています。

この時天草島でも、343人が亡くなるという大被害が発生しています。

この時の津波の高さは良く分かっていますが、この津波の時もし祇園橋が出来ていたら、果たして今日の姿を我々に見せてくれているでしょうか。

ちなみに、この大津波は、祇園橋が完成する40年前の出来事でした。



苓北町富岡の流死者慰霊塔

「両肥溺死萬霊等」

天草には、このほかに多数の慰霊碑が建てられている。

雲仙眉山崩れ津波による天草郡損害〈概況〉

被害18カ村海辺

流家373軒

損家352軒

流馬屋439軒

溺死人343人（男148人、女195人）

流死牛馬109頭（牛45頭、馬65頭）

田畑65町8反余

苗代49町5反ほど

地船67艘

高札場3か所

カライモ畑40町6反余

見取り田15町5反程

土橋11ヶ所・・・など

塩浜16カ所、20町余

『寛政四年島原地変記』金井俊行編より